



発行所
北日本新聞社
富山市安住町2番14号
郵便番号 930-0094
電話(076)445-3300(受付案内)
©北日本新聞社 2002

紙面批評

注目されていた政府の道路関係四公団民営化推進委員会最終報告は、七日朝刊の一面トップで「委員長辞任、採決で決着」の見出しで掲載されていた。高速道路新規建設に厳しい歯止めをかける案に対し、中沖知事の「地方切り捨て」の談話が併せて載った。天地人は道路公団が民営化して健全経営することと必要な高速道路を建設することとは別な話で、都会人が地方のことに思い致さないのは明治以来ずっと変わらないと指摘。社説にも地方の声を切り捨てるなど迫力ある強烈な記事。同日夕刊の悠閑春秋には、能越自動車道高岡―福岡間の期間限定無料

とやまITベンチャー協議会長 松原 吉隆

化は手放しでは喜べないと警鐘を鳴らしている。まさに強力な三点セットの論陣である。そもそも交通・情報通信等の社会資本整備の目的は国民国家の利益であり、努力のない赤字のたれ流しは

地方の声発信に期待

許されないが、問題は単純にコストに見合う採算性だけでなく公益性社会経済効果があるかどうかである。地方の知恵を活かした自立を促す真の日本再生の構造改革の視点で、今後このような論陣を張り声を大にした発信を期待したい。

とやま・家族の肖像(七日)には幼い命の灯と向かい合い、激務を支える夫と息子に感謝する富山医薬大小児科女性医師の市田先生が紹介されていた。人柄が伝わってくる素晴らしい記述である。同日、「知的障害の長男との歩み」を出版した小矢部の斉藤さんが紹介され、五日には心を打つ第二十二回全国中学生人権

かな教育教師ここに在りと思わせた。夕刊の「素顔でこんにち話」、朝刊「記者ノート」も同様であるが、これらの優しく温かく、記者魂が光っている記事は本紙の中でも特に気に入っている。これから私達が忘れていくな一生懸命頑張っている人物や弱者の視点に立ち勇気を与える紙面づくりをお願いしたい。

内容豊富な田中さん報道

返す。日中韓の関係も同様であり、今後の日米関係と日本再生のヒントとしての記事であった。一日は氷見市で開かれた「世界定置網サミット」の内容が二頁を使って読者に分かりやすく報道されていた。氷見は富山、高岡より全国知名度が高いと言われている。観光まちづくりにより生かすことを期待したい。さて、田中耕一さんのノーベル賞授賞式のために郷土紙ならではの現地報道ぶりは、県民に世紀の瞬間を知らせようとする意気込みが伝わる。記念講演や授賞式の模様など内容も豊富で、一連の報道はエキサイティングで秀逸の一言。今年、最も印象に残った人物、田中耕一さんの報道を通じて、今後も県民はもとより全国・世界へ向けての発信を期待したい。